

拾六町亀田 1
次郎丸高石 4
田 村 13

—拾六町亀田遺跡第1次調査及び次郎丸高石遺跡第4次調査、田村遺跡第18次調査報告書—

1 9 9 9

福岡市教育委員会

序

「活力あるアジアの拠点都市」として都市づくりを進めている福岡市は、古くから我が国と大陸との主要な窓口でした。とりわけ、市域の西部にあたる早良平野には最古の王墓と呼ばれる吉武高木遺跡、環濠集落の野方遺跡など、数多くの重要な遺跡が知られています。本市では、文化財の保護・活用に努めており、失われていく遺跡については、記録保存のための発掘調査を実施しています。

本書は拾六町亀田遺跡第1次、次郎丸高石遺跡4次及び出村遺跡第18次調査の報告書であります。本書が市民の皆様の文化財への認識と理解の一助となり、学術研究の資料になれば幸いです。

最後になりましたが、株式会社ナフコ様、田中正彦様、重松鈴子様をはじめとする関係各位のご協力に対して厚く感謝の意を表します。

平成11年1月29日
福岡市教育委員会
教育長 町田 英俊

例　言

1. 本書は福岡市西部で行われた民間開発に伴い、福岡市教育委員会が国庫補助を得て調査を実施した、拾六町亀田遺跡群第1次、次郎丸高石遺跡群第4次、田村遺跡群第18次調査の報告書である。
2. 本書に使用する遺構実測図は大庭康時、菅波正人が、遺物実測図は大庭が実測した。製図は大庭、藤村佳久恵が行った。
3. 本書に使用する遺構、遺物写真は大庭、菅波が撮影した。
4. 本書に使用した方位は磁北である。
5. 遺物・記録類の整理には、今井民代・下山慎子・萩尾朱美・森寿恵・山田順子・田中安恵があつた。
6. 本書の執筆は第1章を大庭、第2、3章を菅波が、編集は大庭、菅波が行った。
7. 今回報告する遺構、遺物に関する記録は埋蔵文化財センターで一括収蔵、保管し、公開、活用していく予定である。

目 次

第1章 拾六町亀田遺跡第1次調査

1.はじめに	1
(1)発掘調査にいたる経過	1
(2)発掘調査の組織と構成	1
(3)遺跡の立地	2
2.調査の記録	4
(1)調査の方法と経過	4
(2)調査の概要	4
(3)遺構と遺物	4
A. 石塚	4
B. 井戸	5
1号井戸	5
2号井戸	5
3号井戸	7
4号井戸	7
C. 土坑	10
6号土坑	10
8号土坑	10
D. その他の遺構	10
SX01	10
SX03	12
E. その他の出土遺物	12
3.まとめ	12

第2章 次郎丸高石遺跡第4次調査

1.調査に至る経緯	13
2.調査組織	13
3.遺跡の位置とこれまでの調査成果	14
4.調査の記録	16
5.小結	16

第2章 田村遺跡第18次調査

1.調査に至る経緯	19
2.調査組織	19
3.調査の記録	20
4.小結	20

挿 図 目 次

Fig. 1 拾六町亀田遺跡位置図	2
Fig. 2 拾六町亀田遺跡第1次調査地点位置図	2

Fig. 3	遺構全体図	3
Fig. 4	井戸実測図1	6
Fig. 5	井戸実測図2	7
Fig. 6	出土遺物実測図1	9
Fig. 7	出土遺物実測図2	11
Fig. 8	次郎丸高石遺跡第4次調査地点位置図(1/4000)	14
Fig. 9	次郎丸高石遺跡第4次調査地点遺構配置図(1/100)	15
Fig.10	掘立柱建物跡遺構実測図(1/60)	16
Fig.11	次郎丸高石遺跡第2次、4次調査地点遺構配置図(1/600)	17
Fig.12	田村遺跡第18次調査地点位置図(1/4000)	20
Fig.13	田村遺跡第18次調査地点遺構配置図(1/150)	21

写真図版目次

Ph. 1	調査区全景(南より)	3
Ph. 2	石塹検出状況(西より)	4
Ph. 3	石塹断面(東より)	4
Ph. 4	1号井戸(東より)	5
Ph. 5	2号井戸(東より)	5
Ph. 6	2号井戸木組、組み合わせ状況	5
Ph. 7	3号井戸・井戸側検出状況	8
Ph. 8	3号井戸、井戸側曲物	8
Ph. 9	4号井戸、井戸側検出状況	8
Ph.10	SX01 土層堆積状況(東より)	10
Ph.11	SX03(北より)	12
Ph.12	次郎丸高石遺跡第4次調査地点西側全景(北から)	17
Ph.13	次郎丸高石遺跡第4次調査地点東側全景(北から)	18
Ph.14	次郎丸高石遺跡第4次調査地点東側柱穴群(南から)	18
Ph.15	田村遺跡第18次調査地点全景(西から)	22
Ph.16	田村遺跡第18次調査地点SB01完掘(東から)	22

第1章 拾六町亀田遺跡第1次調査

1. はじめに

(1). 発掘調査にいたる経過

平成元年（1989）7月、株式会社ナフコより福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市西区拾六町二丁目地内に関する埋蔵文化財事前審査願いが提出された。

申請地は、拾六町亀田遺跡並びに牟田田遺跡の推定範囲にかかっていた。しかし、同遺跡地内での発掘調査例・試掘調査例はなく、埋蔵文化財課では試掘調査が必要との判断を下した。

試掘調査は、平成元年7月26日、埋蔵文化財課常松幹雄・佐藤一郎の立ち会いで、実施された。その結果、申請地西側（牟田田遺跡側）並びに東端は河川の氾濫源で遺構はなく、中程から東側において中世の井戸・土坑・柱穴などを確認することができた。これらの遺構は、表土下40センチ前後で検出されており、建築工事による破壊は必至と予想された。

これを受け、埋蔵文化財課では発掘調査が必要という立場で、株式会社ナフコとの協議に入った。幸いにして、株式会社ナフコのご理解とご協力を得ることが出来、店舗建物部分について大幅にその配置を変更、試掘調査で遺構が検出されなかつた用地東端付近に移動していただくことが出来た。こうして、とりあえず発掘調査の必要は回避できたと思われたが、現地で建物の柱筋を測量したところ、変更後の建物配置でもわずかに遺構の遺存部分にかかることが判明した。

そこで、急遽この部分についてのみ発掘調査を実施することとなり、株式会社ナフコとの間に協議書を締結、同年10月19日にテントを設営、仮設トイレを設置し、同23日より調査に着手した。発掘調査は、埋蔵文化財課第2係の大庭康時が、緊急性の高い調査であるということで、急遽担当することとなった。

(2). 発掘調査の組織と構成

調査原因者	株式会社ナフコ	代表取締役	深町勝義
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	佐藤善郎
調査総括	同 埋蔵文化財課 課長	柳田純孝	
	同 第1係長	飛高憲雄	第2係長 柳沢一男
調査庶務	同 第1係	安部 徹	
調査担当	同 第2係	大庭康時	
調査作業	江越初代 関加代子 曽根崎昭子	関義種 横藤利雄 村崎祐子 森山恭助	
	森山タツエ		

遺跡調査番号	8954	遺跡略号	JRK-1
調査地地番	西区拾六町2丁目325-1外	分布地図番号	橋本91
開発面積	14,381m ²	調査面積	363m ²
調査期間	1989年10月23日～1989年11月2日		

(3). 遺跡の立地

拾六町亀田遺跡は、福岡市西半部の早良平野を北流する室見川左岸の沖積地に位置し、東を室見川の分流である古川に、西は十郎川によって画される。

遺跡範囲の南には、ほぼ100m四方を土塁で囲んだ一町屋敷跡が含まれる。中世の居館跡と思われるが、調査例・伝承等は全くない。

紙数の関係から周辺の遺跡の状況・知見については、詳述できない。福岡市埋蔵文化財調査報告書第305集・第349集・第542集に詳しいので、ご参照いただきたい。



Fig.1 拾六町亀田遺跡位置図 (1/25000)



Fig.2 拾六町亀田遺跡第1次調査地点位置図 (1/2000)



Ph.1 調査区全景（南より）

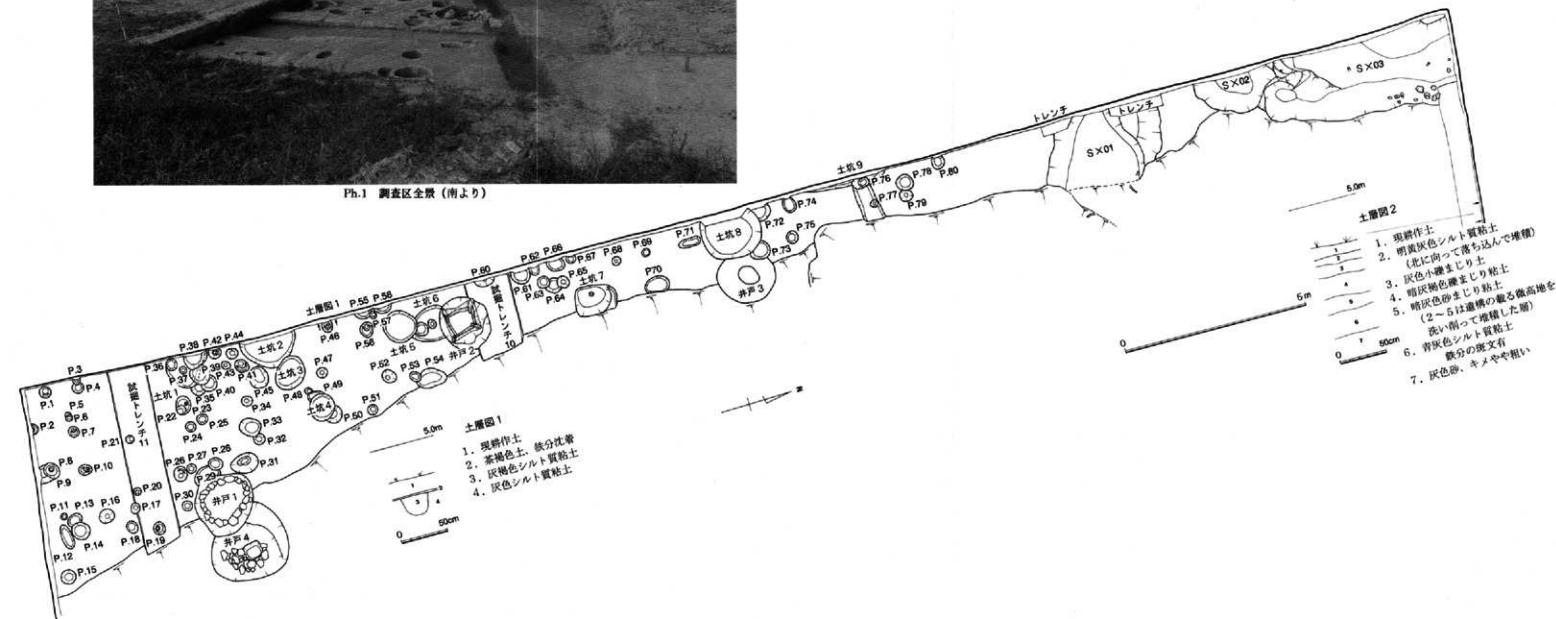


Fig. 3 遺構全体図(1/100)

2. 調査の記録

(1). 調査の方法と経過

前節で述べたような経過で発掘調査に入ったため、調査対象部分は建物部分によって破壊が予想される最小部分に限られることとなった。

発掘調査にあたっては、まずバックホーにより表土を除去した。表土除去は、試掘調査によって遺構の存在が確認されている微高地側から、東側の旧河川に向けて掘り進め、遺構が確認できなくなつたところで掘削を止めることとした。その結果、非常に狭長な調査区ができあがった。

表土除去には1989年10月23日・24日の二日間を要し、並行して遺構検出・精査を行った。その後は比較的天候にも恵まれ、11月2日すべての調査工程を終了した。

(2). 調査の概要

遺構は、シルト質の粘質土上において検出した。基本的な層序は、Fig.3に示す。この粘質土は調査区西側で高く、遺構分布の中心がそちら側にあることを示している。これに対し調査区東側では、急激に下降し、旧河川の砂がかぶっていた。この砂の下の傾斜面には井戸が残っており、本来さらにも東まで遺構が延びていたものが、河川に洗われて流失したことが知られる。

調査区が狭長なため、遺跡の全体を知るに足る十分な成果は得られなかった。おおまかには、調査区の南北分では柱穴・井戸が多く、北半分では流路状の不整形の落ち込みが重複してみられた。

また、調査区から20メートルほど西側に、礫をマウンド状に積み上げた石塚が見られた。これについても調査を行ったが、調査区内の遺構よりも後出するもので、直接の関係はないものである。

(3). 遺構と遺物

今回の発掘調査で検出した遺構は、柱穴80基、土坑9基、井戸4基、不明遺構（流路？）3基である。この他、調査区西側で石塚1基を調査した。以下、主要な遺構とその出土遺物について、略述する。

A. 石塚

調査区の西側約20メートルに残されていたもので、旧水田内に築かれている。平面的には、一辺約3メートルの隅丸方形を呈し、高さ約1.3メートルの兜状に積み上げる。Ph.3の如く、まず高さ45センチほどの盛り土をした後、角礫を積んだものだが、内部には全く施設らしいものはみられなかった。

出土遺物の一部をFig.3-1～7に示す。1・2・7は青磁、3～6は染付である。1は中国（南宋）、2～6は中国（明）、7は肥前磁器であろう。3の見込みは、露胎である。



Ph.2 石塚検出状況（西より）



Ph.3 石塚断面（東より）

B. 井戸

1号井戸

調査区南側で検出した井戸で、4号井戸を切る。長径115センチ、短径85センチの梢円形に砾を巡らせた石積井戸で、深さ65センチが残る。水溜は、設けられていない。

土師器坏・皿片・土鍋片・平瓦片が、少量出土した。Fig.6-11に常滑焼きの甕（または壺）を図示した。折り返した口縁部分で、中野・赤羽編年では、6a期（13世紀第3四半期）にあたる。

4号井戸との切り合いから、14世紀以降に下る可能性がある。

2号井戸

調査区中程から検出した井戸である。一辺120センチ前後をはかる隅丸方形の掘り方に、細竹を立て並べて、80センチ四方ほどの井戸側を作る。

細竹は、掘り方の壁に当てて、上で広く、下で狭く並べられ、内側の四隅には継杭を、各片には桁木を当てて押さえつける。桁木は、継杭の中程に穿たれたほど穴もしくは欠き込みに通して固定される。ただし、北辺の桁の西端は北西角の杭の背後に、南辺の桁の東端は南東角の杭の内側にあ



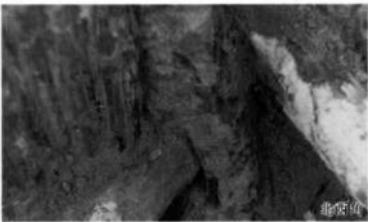
Ph.4 1号井戸（東より）



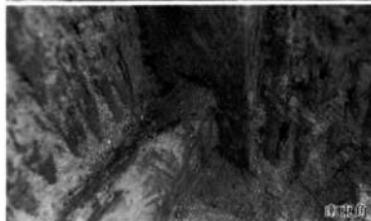
Ph.5 2号井戸（東より）



南西角



北東角



南東角



北西角

Ph.6 2号井戸木組、組み合わせ状況

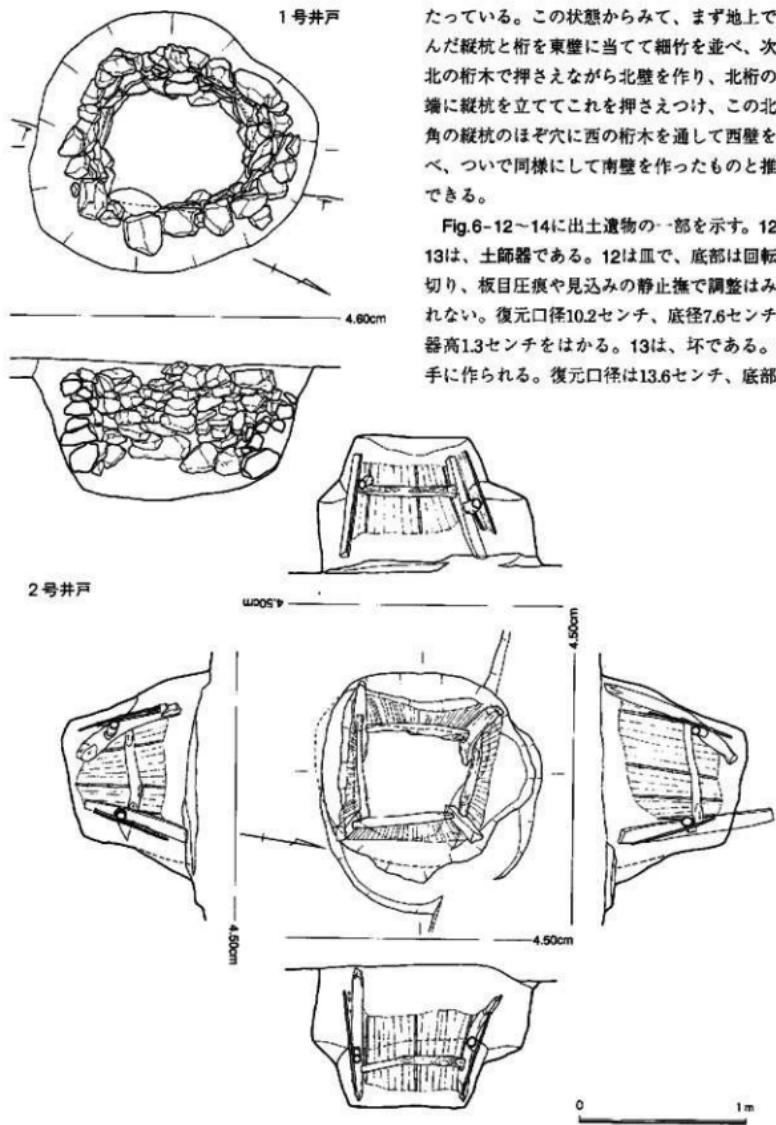


Fig.4 井戸実測図 1 (1/30)

たっている。この状態からみて、まず地上で組んだ継杭と桁を東壁に当てて細竹を並べ、次に北の桁木で押さえながら北壁を作り、北桁の西端に継杭を立ててこれを押さえつけ、この北西角の継杭のはぞ穴に西の桁木を通して西壁を並べ、ついで同様にして南壁を作ったものと推測できる。

Fig.6-12～14に出土遺物の一部を示す。12・13は、土師器である。12は皿で、底部は回転糸切り、板目圧痕や見込みの静止撫で調整はみられない。復元口径10.2センチ、底径7.6センチ、器高1.3センチをはかる。13は、壺である。薄手に作られる。復元口径は13.6センチ、底部は

残っていないが、遺存部分から口径に比して底径は小さいものと知れる。14は、褐色陶器の壺である。遺存部位の全面に、淡緑褐色の不透明釉が施される。胎上は明灰色で肌理細かいが、黒色粒・赤色粒が混じり、若干の空隙が見られる。この他、瓦質土器の鉢片・青磁の鍋進介文碗片須恵器小片などが出土している。13世紀代に属するものであろう。

3号井戸

調査区中程の傾斜面から検出した井戸である。後述する8号土坑に切られる。直径130センチほど円形の掘り方の中央に、底を抜いた曲げ物を据えて井戸側とする。木質の遺存状態が極めて良かつたにも拘らず、二段目から上はみられず、本来積み上げていなかったものと推測される。

Fig.6-22に、井戸側の曲げ物を図示した。長径60センチ、短径48センチの橢円形を呈し、高さは46センチをはかる。板材は、内面で二段、外面で三段を積み上げており、さらに外側を二段のたが状に一枚の板材がめぐる(Ph.8)。この他には、遺物の出土はみなかった。切り合ひ関係から、13世紀以前の井戸と考えられる。

4号井戸

1号井戸のさらに東側から、これに切られて検出した井戸である。北側に段を持った、長軸210センチ、短軸190センチ以上の二段掘り状の掘り方の中央を、約45センチ四方に掘りくぼめ、これに

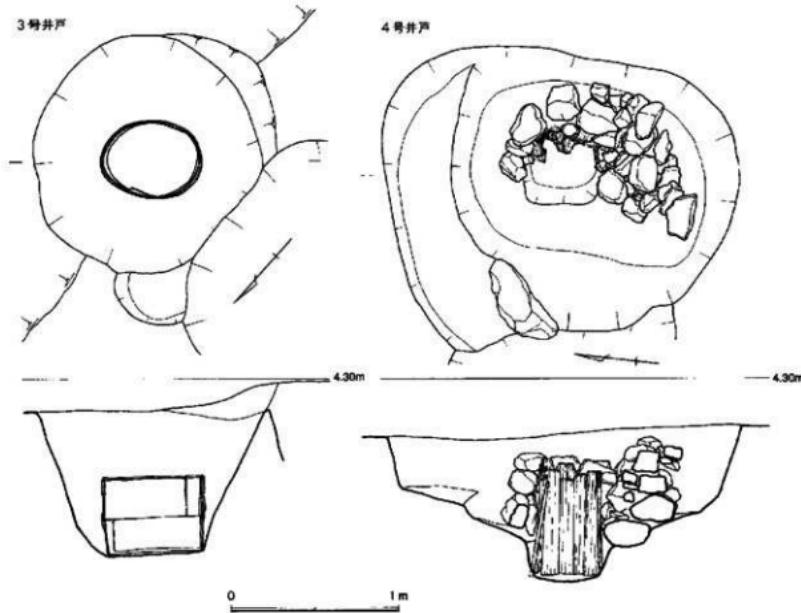


Fig.5 井戸実測図2 (1/30)



北東より



南東より



北東より



西より

Ph.7 3号井戸・井戸側検出状況



Ph.8 3号井戸、井戸側曲物



北より



西より

Ph.9 4号井戸・井戸側検出状況

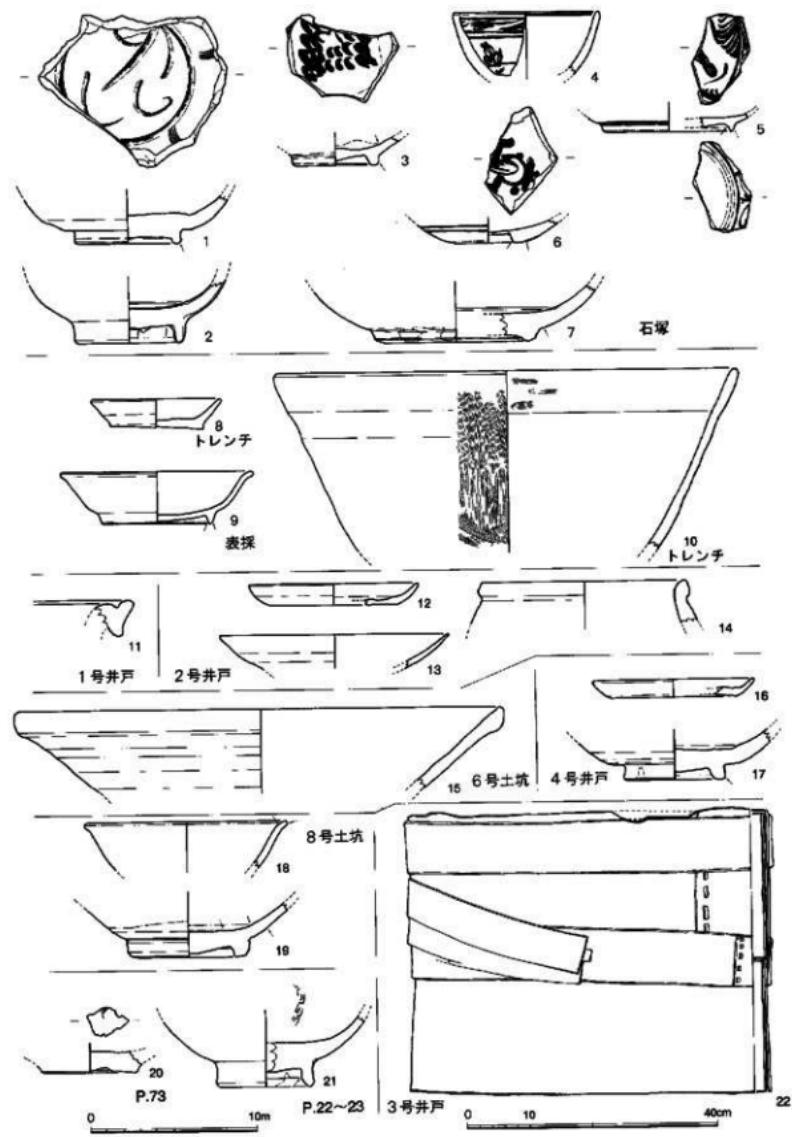


Fig.6 出土遺物実測図1 (1~21…1/3, 22…1/8)

板を立て並べて井戸側とする。板材の裏側には、裏込め状に礫を落とし込んでいる。

土師器皿、東播系須恵器鉢、瓦質土器鉢、備前焼すり鉢、青磁碗などの破片が出土している。Fig. 6-16は、土師器の皿である。底部は回転糸切りする。復元口径9.7センチ、底径7.5センチ、器高1.1センチをはかる。17は、龍泉窯系青磁の碗である。明灰色で緻密な胎土に、灰濁した緑色の半透明釉をかける。疊付きから外底は、露胎となる。焼き締めの備前焼破片が出土している点から、14世紀代以降に下る可能性がある。

C. 土坑

柱穴・井戸ではない、意図的に掘削された遺構について土坑とした。基本的には、廐棄坑と考えられるが、9号土坑はその一部分を検出したにとどまっており、廐棄坑とは断じ得ない。

遺物の出土は極めて少なく、わずかに実測に耐えた土坑についてのみ、報告する。

6号土坑

2号井戸と5号土坑に切られて検出した遺構である。長軸110センチ（推定）、短軸95センチの卵形を呈し、検出面からの深さは14~20センチをはかる。内部に柱穴2基がみられるが、本遺構とは直接関係ない。

Fig.6-15に、出土した東播系須恵器のこね鉢を示した。細かい砂粒を多く含んだ肌理の粗い胎土で、焼成はやや瓦質ばかり、明灰色を呈する。口縁部のみ黒化して、暗灰色となる。外面は、横撫で調整される。魚住窯の製品と思われる。13世紀代に編年される遺物である。

8号土坑

前述した3号井戸を切る土坑である。直径165センチの円形を呈し、深さは50センチ前後をはかる。その形状から素掘りの井戸の可能性もあるが、他の井戸に比べて浅く、土坑として扱う。

Fig.6-18・19は、白磁である。18は、口禿の皿で、口縁部の釉を削り取っている。19は、碗である。外底部は露胎で、見込みは輪状に胎を搔きとる。13世紀前半における大過なかろう。

D. その他の遺構

SX01

調査区を横断する、流路状の落ち込みである。北壁に沿って、木杭が2本打ち込まれている。

Fig.7-1~4に出土遺物を示す。1は、土師器の皿である。底部を回転糸切りする。板目压痕・内底の静止塗装で調整はみられない。全体にローリングを受けて、摩耗している。復元口径7.9センチ、底径7.0センチ、器高1.1センチをはかる。2は、明の染付皿である。白色で緻密な胎土に、やや青みを帯びた透明釉をかける。疊付から高台内にかけて、露胎となる。見込みには、荒磯文を描く。3・4は、弥生土器の壺である。ともに、激しくローリングを受け、摩滅している。

16世紀代の流路と考えられる。



Ph.10 SX01土層堆積状況（東より）

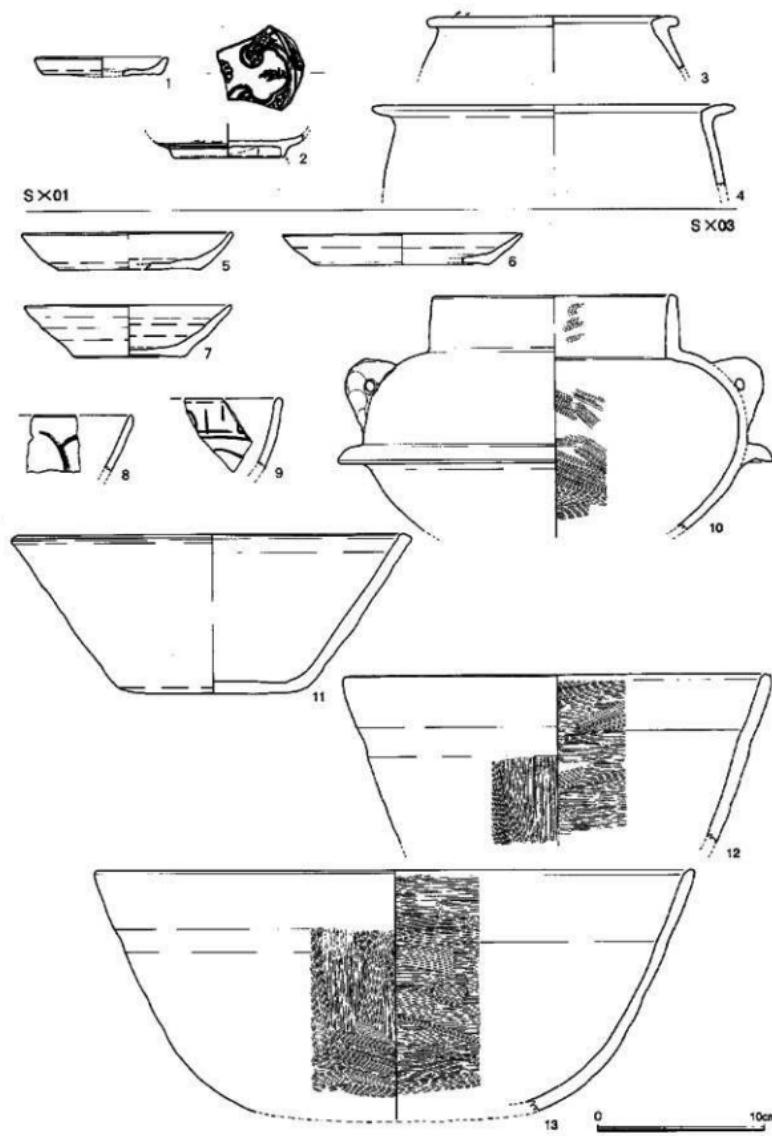


Fig.7 出土遺物実測図 2 (1/3)

SX03

調査区北端近くから検出した、溝状の流路である。西から北に弧を描いて流れる。東壁に杭が打たれ、角礫がみられる。

Fig.7-5～13に出土遺物を示す。5～7は、土師器の壺である。いずれも回転糸切りで、板目圧痕、見込みの撫で調整を持たない。復元口径・底径、器高は、それぞれ12.5・8.6・2.2センチ、14.4・10.3・1.83センチ、12.2・6.8・3.1センチをはかる。8・9は、青磁の碗である。8は片切り彫りで蓮弁文を、9は沈線で雷文と蓮弁を描く。10は、瓦質土器の羽釜である。灰色で砂混じりの胎土だが、表面は炭素吸着により暗灰色を呈する。内面は刷毛目、外面は横撫で調整で、錫部から下位には煤が付着している。11は、土師質土器の鉢である。表面は摩耗し、調整痕跡は見えない。径2ミリ以下の砂礫を多く含む粗い胎土で、黄味を帶びた淡褐色を呈する。12・13は、土鍋である。口縁部は、わずかに屈曲する。口縁部外面は横撫で調整、他は刷毛目調整で、外面には煤が付着している。

15世紀代を当てれば、大過ないものと考える。

E. その他の出土遺物

Fig.6-8～9は、表土掘削及びトレンチから出土した遺物である。8は、土師器の皿である。底部は回転糸切りで、板目圧痕・見込み撫で調整はみられない。完形品で、口径7.8センチ、底径5.3～5.5センチ、器高1.8センチをはかる。9は、白磁の皿である。全面施釉の後、豊付の袖を搔き取る。10は、土鍋である。淡赤褐色を呈し、外底部付近に煤が付着している。

20・21は、柱穴出土遺物である。20は、P20出土の越州窯系青磁碗である。蛇の目高台で、端部には目痕が残る。全面にオリーブ色の袖をかける。見込みに、沈線状のへこみが見えるが、文様かどうか判断できない。21は、龍泉窯系青磁碗である。灰色で緻密な胎土に、深緑色の半透明袖をかける。豊付の内側まで施釉するが、高台内は露胎となる。見込みには、薄く雷文のスタンプが認められる。P22～23から出土した。

3.まとめ

今回の発掘調査では、13世紀から16世紀にかかる遺構を検出することができた。これをより詳細にみると、井戸・土坑などはおおむね13～14世紀、SXとした流路が15～16世紀と、生活遺構としての中心は、中世前半にあったことが言えよう。質的に際だった遺物はみられず、聚落遺跡を見て、大過ないものと考える。

本調査地点のすぐ南側には、ほぼ一町四方を土塁で囲んだ、一町屋敷跡が残る。今回の調査では、この居館跡との関わりを示唆する成果は得られなかった。一町屋敷跡は、マンション建設で既にその東南角を破壊されている。埋蔵文化財の、より一層の周知の必要が痛感される次第である。



Ph.11 SX03 (北より)

第2章 次郎丸高石遺跡第4次調査

1. 調査に至る経緯

埋蔵文化財課では開発計画が上がると試掘調査を実施し、各地点の状況の把握を努めている。その上で、地権者と遺跡保全のために設計変更等の協議を持つ。しかし、建物の構造上、地下の遺構に影響を及ぼす場合、地権者との協議を持って、記録保存のための調査を実施している。

1995年（平成7年）11月21日、田中正彦氏より、埋蔵文化財事前審査願いが提出され、同年12月5日に試掘調査を行った。調査前の現況は宅地である。申請地の中央で約90cmの表土・旧耕作土を除去すると疊まじりの黄褐色砂質土となり、その面で柱穴を検出した。この成果を基に地権者と協議を持ったが、現状保存、設計変更等は困難であったため、記録保存のための発掘調査を行うこととなつた。

本調査地点は次郎丸高石遺跡の中央に位置する。調査前の標高は約11mを測る。調査は申請地の南側を中心に、約90cmの表土・旧耕作土を除去した後の黄褐色粘土を遺構面として行った。なお、残土処理の関係で、まず、西側半分の調査を行い、その後、残土を反転して東側部分の調査を行った。

遺構は弥生時代～中世の柱穴、弥生時代の掘立柱建物2棟等を検出した。遺物は柱穴から、弥生土器、土師器、中国製青磁等が出土した。

調査は1996年（平成8年）1月8日から1月19日まで行った。

2. 調査組織

調査は以下に示す組織構成で実施した。調査に際しては田中正彦様、末永工務店様をはじめとした関係者の方々には条件整備等で大変御世話になりました。ここに記して謝意を表します。

調査委託	田中正彦
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 町田英俊 文化財部長 後藤直（前任） 平塚克則 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝（前任） 柳田純孝 埋蔵文化財第一係長 横山邦繼（前任） 二宮忠司
調査庶務	埋蔵文化財第一係（現、文化財整備課） 内野保基（前任）
調査担当	埋蔵文化財第一係 菅波正人（現、大規模事業等担当）
調査作業	加島定次郎 徳永洋二郎 烏井原良治 原美晴 船越恒夫 堀本歳四郎 松本みつ子 横尾泰広
整理作業	山田順子 田中安恵

調査番号	9548	遺跡略号	JRT4	分布地図	83
所在地	早良区次郎丸1丁目61-4				
調査対象面積	200 m ²	調査面積	155 m ²		
調査期間	1996年1月8日～1月20日				

3. 遺跡の位置とこれまでの調査成果

今回調査を行った次郎丸高石遺跡は早良平野の中央にあたり、室見川と金屑川に挟まれた低位段丘上に位置する。これまで本遺跡での調査例はほとんどなかったが、1992年に行われた福岡外環状道路建設に伴う発掘調査により、本遺跡に様相も少しずつ判明してきた。あわせて、周辺には同様の地形に次郎丸遺跡、免遺跡、野芥大蔵遺跡、野芥遺跡等の弥生時代～中世にわたる集落遺跡や生産遺跡が存在することも判明した。次郎丸高石遺跡はこれまで（1998年度現在）、4次の調査が行われている。これまでの調査を概観すると、旧石器時代から縄文時代の遺物が出土するが、遺構としては弥生時代中期以降に土坑、掘立柱建物等が見られるようになる。それ以後、遺構の密度は散漫であるが、古墳時代から中世にかけて集落遺構等が見られるようである。

第1次調査（調査番号：7912、調査期間：1979年10月～1980年5月、調査要因：学校建設）

調査地点は標高13m程の低丘陵にあたり。調査では縄文時代晚期から弥生時代中期にかけての溝、土坑、杭列などが検出されている。市報告書第69集に掲載。

第2次調査（調査番号：9233、調査期間：1992年7月～1992年11月、調査要因：道路建設）

調査地点は標高11m前後の低丘陵にあたり、第4次調査の南側に隣接する。調査では弥生時代中期から古墳時代前期にかけての掘立柱建物、溝、土坑、井戸などが検出されている。市報告書第467集に掲載。

第3次調査（調査番号：9238、調査期間：1992年9月～1993年3月、調査要因：道路建設）

調査地点は標高10m程の低丘陵にあたり。調査では古墳時代後期から中世にかけての掘立柱建物、溝、自然流路、土坑などが検出されている。市報告書第536集に掲載。



Fig.8 次郎丸高石遺跡第4次調査地点位置図 (1/4000)

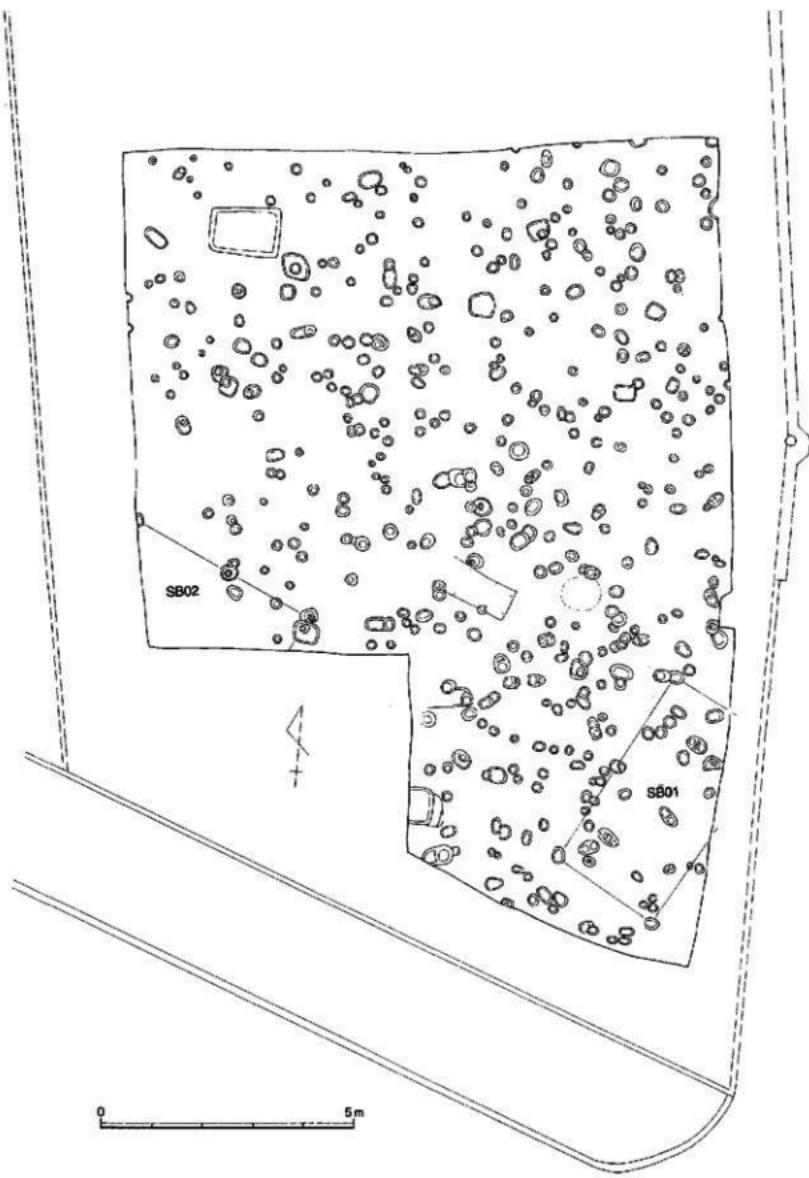


Fig.9 次郎九尚石遺跡第4次調查地点遺構配置図 (1/100)

4. 調査の記録

今回の調査では200基を超える柱穴を検出したが、遺物が出土したものは16基で、大半は遺物が出土しなかった。出土遺物は弥生土器、古式土師器が大半で、わずかに中世土師器や中国製青磁等がある。柱穴の覆土や出土遺物等から遺構の大半は弥生時代から古墳時代に位置づけられるものと考える。このうち、建物として復元できたのは2棟のみである。

SB01 (Fig.10)

調査区東側に位置する。主軸方位はN-29°-Eを測る。柱穴は4個、1×2間分を検出した。柱穴は径20~30cmの円形プランで、深さ20~30cmが残存する。柱間は梁行約2.3m、桁行約4.3mを測る。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。遺物は弥生土器、古式土師器等が出土した。時期は古墳時代に位置づけられると考える。

SB02 (Fig.10)

調査区西側に位置する。主軸方位はN-25°-Wを測る。柱穴は3個、2間分を検出した。柱穴は一辺約30cmの隅丸方形プランで、深さ約40cmが残存する。柱間の現存長は4mを測る。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。遺物は弥生土器、古式土師器等が出土した。時期は古墳時代に位置づけられると考える。

5. 小 結

今回の調査では主に弥生時代から古墳時代の時期に位置づけられる柱穴を多数検出した。このうち建物として復元できたものは2棟のみである。これらの建物は古墳時代前期に位置づけられるものと考える。南側隣接地の第2次調査でも該期の掘立柱建物が数棟検出されており、沖積地の微高地に形成された集落遺跡と推測される。また、柱穴から弥生時代前期に位置づけられる土器も数点出土しており、周囲にも該期の遺構の存在が予想される。今後の周辺の調査成果が待たれる。

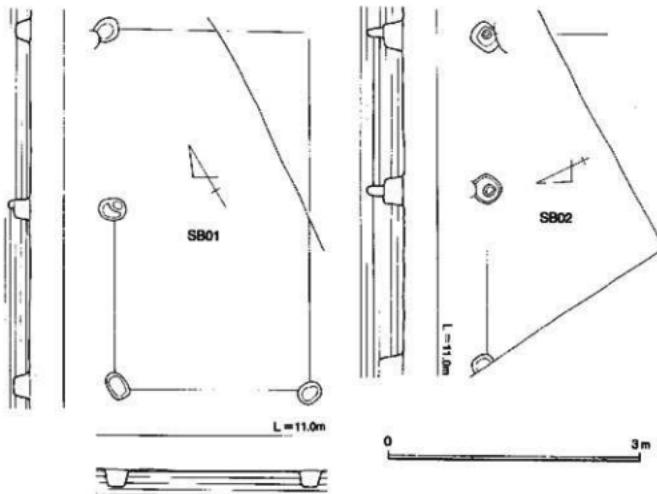


Fig.10 掘立柱建物跡遺構尖端図 (1/60)

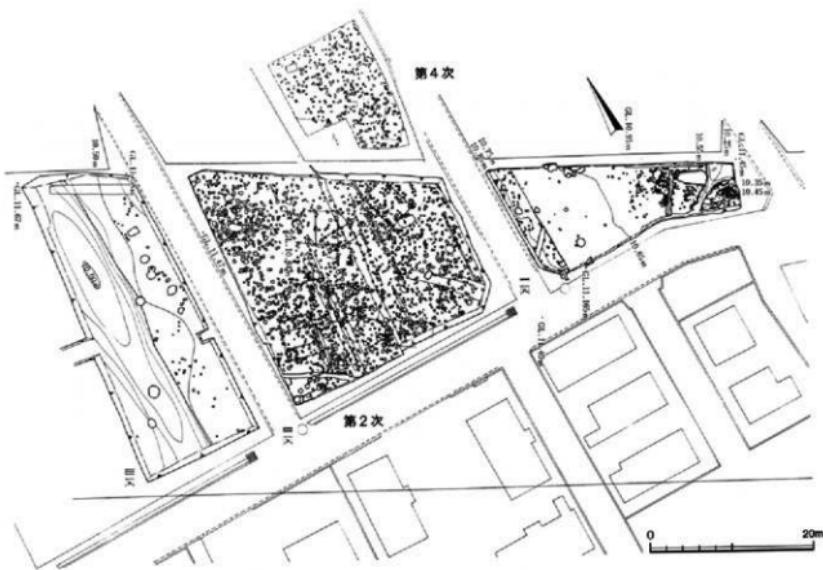


Fig.11 次郎丸高石遺跡第2次・4次調査地点配置図 (1/600)



Ph.12 次郎丸高石遺跡第4次調査地点西側全景 (北から)



Ph.13 次郎丸高石遺跡第4次調査地点東側全景（北から）



Ph.14 次郎丸高石遺跡第4次調査地点東側柱穴群（南から）

第3章 田村遺跡第18次調査

1. 調査に至る経緯

1996年（平成8年）3月8日、重松鈴子氏より、埋蔵文化財事前審査願が提出され、同年6月20日に試掘調査を行った。調査前の現況は水田である。申請地の北側で約30cmの耕作土を除去すると黄灰色シルト層となり、その面で柱穴を検出した。この成果を基に地権者と協議を持ったが、現状保存、設計変更等は困難であったため、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

田村遺跡は室見川右岸の沖積地の微高地上に立地する。本遺跡では1998年度現在、20次の調査が行われている。これまでの調査では弥生時代前期～中期の堅穴住居跡、壺棺墓、古墳時代前半の堅穴住居跡、古代～中世の掘立柱建物跡、井戸、溝等が検出されている。特に本調査地点の東側に位置する第5次調査では绳文時代晚期の土坑、溝、弥生時代前期の壺棺墓、11世紀～14世紀にわたる掘立柱建物跡100棟以上、井戸、溝等の数多くの遺構が検出されている。

本調査地点は田村遺跡の西側に位置する。調査前の標高は約15mを測る。調査は申請地の北側半分の遺物建築部分について実施した。約30cmの耕作土を除去した後の黄灰色シルト層を遺構面として行った。

遺構は中世の柱穴、掘立柱建物1棟等を検出した。遺物は柱穴から、弥生土器、中世土師器、中国製陶磁器等が出土した。

調査は1996年（平成8年）8月2日から8月7日まで行った。

2. 調査組織

調査は以下に示す組織構成で実施した。調査に際しては重松鈴子様、九州大東建設株式会社様をはじめとした関係者の方々には条件整備等で大変御世話になりました。ここに記して謝意を表します。

調査委託	重松鈴子
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 町田英俊
	文化財部長 後藤直（前任） 平塚克則
	埋蔵文化財課長 荒巻輝勝（前任） 植田純孝
	埋蔵文化財第一係長 横山邦繼（前任） 二宮忠司
調査庶務	埋蔵文化財第一係（現、文化財整備課） 内野保基（前任）
調査担当	埋蔵文化財第一係 背波正人（現、大規模事業等担当）
調査作業	栗木和子 辻節子 三谷朗子 横尾泰広
整理作業	山田順子 田中安恵

調査番号	9624	遺跡略号	TMR18	分布地図	93
所在地	早良区田村3丁目758の一部				
調査対象面積	930 m ²	調査面積	500 m ²		
調査期間	1996年8月2日～8月7日				

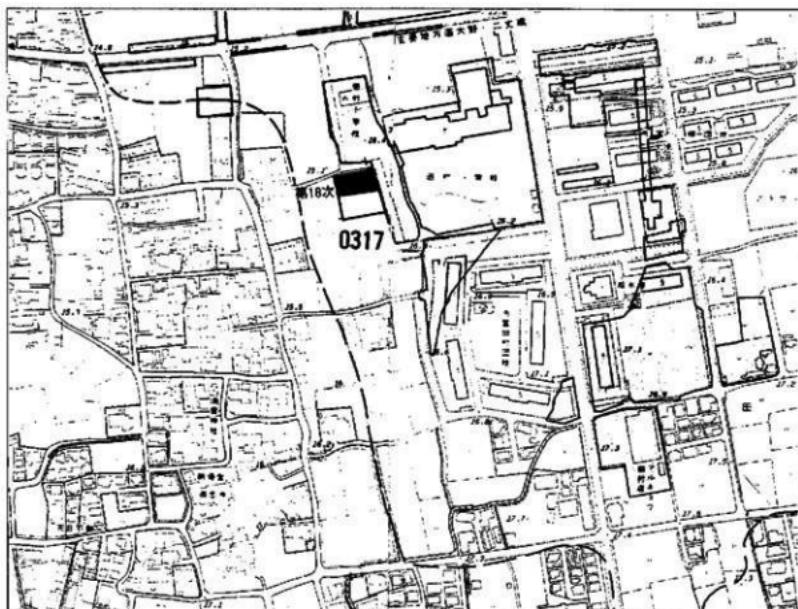


Fig.12 田村遺跡第18次調査地点位置図 (1/4000)

3. 調査の記録

今回の調査では基の柱穴を検出したが、このうち、建物として復元できたのは1棟のみである。出土遺物は中世土師器や中国製陶磁器等がある。

SB01 (Fig.13)

調査区西側に位置する。主軸方位はN-85°-Wを測る。柱穴は8個、 2×3 間分を検出した。柱穴は径20~30cmの円形プランで、深さ10~30cmが残存する。柱間は梁行約3.3m、桁行約9mを測る。柱穴の埋土は色粘質土である。遺物は中世土師器等が出土した。時期は中世前半に位置づけられると考える。

4. 小 結

東側に隣接する第5次調査では該期の掘立柱建物や井戸等を多数検出しているが、今回の調査では中世前半期に位置づけられる掘立柱建物を1棟検出したのみである。調査区西側の試掘調査などでは耕作土直下で砂礫層となり、その部分は旧河川の流路であったと推測される。今回検出した建物は方位などは第5次調査のものと一致するものの、遺構密度は散漫であり、集落の縁辺部にあたるものと考えられる。

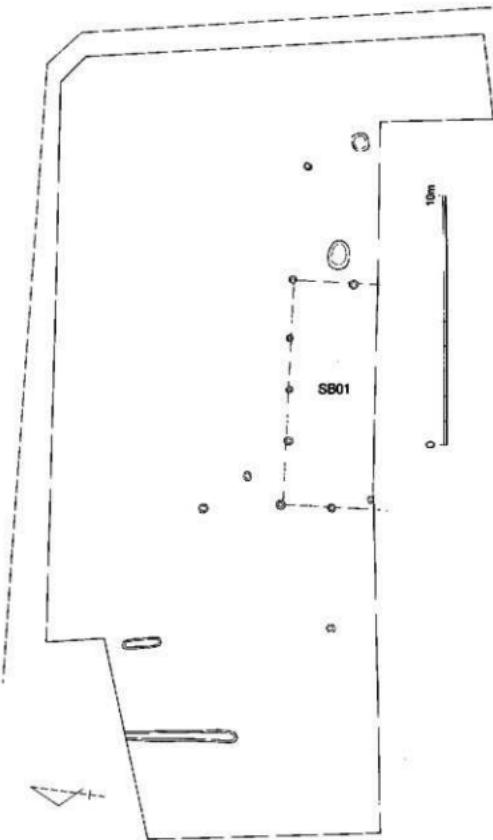


Fig.13 田村遺跡第18次調査地点配置図 (1/150)



Ph.15 田村遺跡第18次調査地点全景（西から）



Ph.16 田村遺跡第18次調査地点SB01完掘（東から）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第612集

拾六町亀田1

次郎丸高石4

田 村13

—拾六町亀田遺跡第1次調査及び次郎丸高石遺跡
第4次調査、田村遺跡第18次調査報告書—

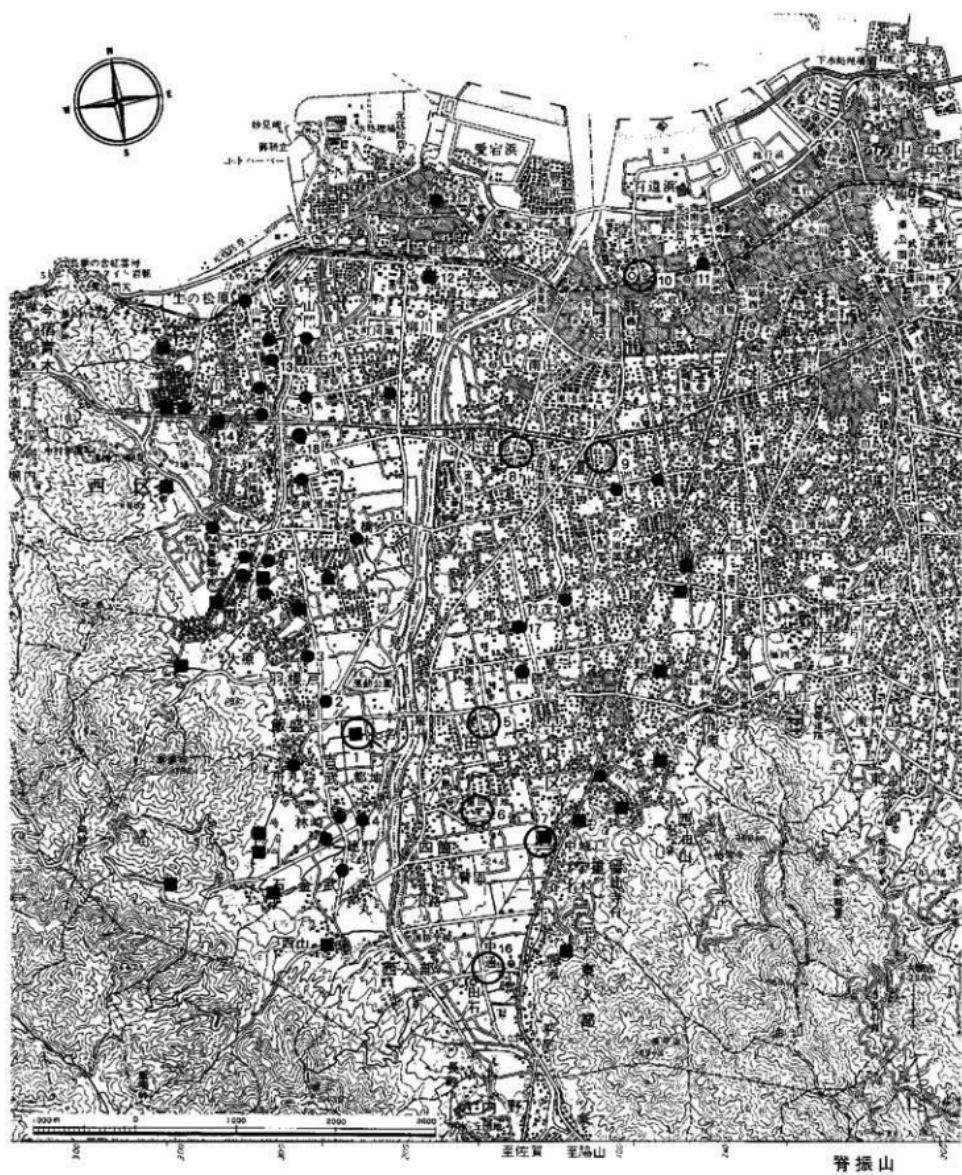
1999年1月29日

発 行 福岡市教育委員会

〒810-0001 福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 高良印刷

〒810-0074 福岡市中央区大手門2-9-23



- | | | |
|---------|----------|-------------|
| 1 古武遺跡群 | 7 拝塚古墳 | 13 拾六町ツイジ遺跡 |
| 2 太田遺跡 | 8 有田遺跡群 | 14 宮ノ前遺跡 |
| 3 羽椎戸遺跡 | 9 原遺跡群 | 15 野方遺跡 |
| 4 都地遺跡 | 10 藤崎遺跡群 | 16 東人部遺跡群 |
| 5 田村遺跡群 | 11 西新町遺跡 | 17 次郎丸高石遺跡 |
| 6 四箇遺跡群 | 12 五島山古墳 | 18 拾六町亀田遺跡 |

(○)遺跡群
(●)遺跡
(■)古墳